

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	仲川 秀樹 (なかがわ ひでき)
○学位の種類	博士 (社会学)
○授与番号	乙 第 533 号
○授与年月日	2015 年 3 月 6 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 2 項 学位規則第 4 条第 2 項
○学位論文の題名	H・ブルーマー集合行動論の社会学的研究 —流行理論を軸として—
○審査委員	(主査) 筒井 淳也 (立命館大学産業社会学部教授) 金山 勉 (立命館大学産業社会学部教授) 宝月 誠 (京都大学名誉教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、アメリカの社会学者、ハーバート・ブルーマー (Herbert Blumer) の代表的理論の 1 つである「集合行動論」、および集合行動論の適用事例としてブルーマーが着目した「流行」理論についての解釈を軸に、社会学的分析を展開したものである。ブルーマーの集合行動論は、混乱と無秩序を伴う社会の動きから、秩序がどのように成立するか、という点から、社会の形成過程を理解した研究である。集合行動の領域としての流行現象の根底にあるのは、人びとの集まりは相互に影響をおよぼし、社会を一つの方向に動かしていくという見方である。それを導く要素として、流行という現象を位置づけることができる。流行を対象とし、その構造と機能を探り、その時代の変動との関連をみていくという作業を、ブルーマーの流行理論の枠組みによって行っている。

本章の構成は以下のとおりである。

序章 H・ブルーマー社会学の源流.....	1
第 1 節 ブルーマー社会学の位置.....	1
第 2 節 ブルーマー社会学の原点.....	2
第 3 節 ブルーマー社会学の本質.....	5
第 4 節 実証研究の重要性をめざして.....	7

第5節	初期の社会学からつぎの展開.....	9
第6節	ミクロ社会学からマクロ社会学へ.....	11
第1章	H・ブルーマー社会学の軌跡.....	18
第1節	ブルーマー社会学のパースペクティヴ.....	18
第2節	ブルーマー社会科学の方法.....	19
第3節	マス・コミュニケーション研究.....	21
第4節	社会問題・実証研究について.....	24
第5節	産業化・社会変動とのかかわり.....	25
第6節	集合行動論とシンボリック相互作用論.....	27
第7節	ジェネリックな社会学へ.....	29
第2章	H・ブルーマーの集合行動論.....	36
第1節	集合行動論のアウトライン.....	36
第2節	集合行動論の変容.....	40
第3節	集合行動論における社会秩序.....	43
第4節	集合行動論の基本的概念.....	47
第5節	集合行動論のメカニズム.....	52
第6節	集合行動論から流行理論研究へ.....	57
第3章	集合行動論からみた流行の構造と機能.....	65
I	流行の基礎理論.....	65
第1節	流行の基本的概念.....	65
第2節	流行の基本的特性.....	69
第3節	流行の発生領域.....	72
II	流行のミクロ的レベル.....	77
第1節	流行を採用する個人の動機.....	77
第2節	流行を選択するパターン.....	83
第3節	流行受容と感受性.....	87
III	流行のマクロ的レベル.....	90
第1節	流行の発生する社会構造.....	90
第2節	流行は社会を表出する.....	94
第3節	流行と社会変動.....	97
第4章	H・ブルーマーの流行理論.....	107
第1節	1968年の流行基礎研究.....	107
第2節	流行のパースペクティヴ.....	108
第3節	流行の解釈.....	110
第4節	社会変動の過程.....	113
第5節	流行の社会的機能.....	116

第6節	集合的嗜好.....	117
第7節	ファッド	119
第5章	H・ブルーマーの集合的選択理論.....	123
第1節	1969年の流行研究.....	123
第2節	流行に関する曖昧な社会学的研究.....	124
第3節	階級分化論から集合的選択理論へ.....	127
第4節	流行メカニズムの分析.....	135
第5節	流行の一般的性質.....	140
第6節	流行と現代社会.....	143
第6章	H・ブルーマー流行理論の再考.....	151
第1節	F・デーヴィスのブルーマー研究.....	151
第2節	デーヴィスのブルーマー流行理論研究への関心.....	152
第3節	ブルーマー流行理論の再考.....	154
第4節	古典理論に対抗したブルーマー.....	156
第5節	デーヴィスの流行理論.....	159
第6節	集合的選択理論の有効性.....	161
第7章	H・ブルーマー集合行動論から流行理論、そしてファッション論へ.....	167
第1節	ブルーマー理論で締めくくる.....	167
第2節	ブルーマー流行理論の特質.....	172
第3節	ブルーマー流行理論の課題.....	176
第4節	ブルーマーファッション論の論点.....	179
第5節	ブルーマーファッション論の評価.....	183
結び	H・ブルーマーの提起した問題と残された問題.....	190
第1節	ブルーマーを振り返る.....	190
第2節	ブルーマー像.....	191
第3節	ブルーマーの提起した問題.....	194
第4節	ブルーマーの残したもの.....	197
第5節	ブルーマーの未解決部分.....	199
第6節	これからのブルーマー研究.....	202

本章の概要は以下のとおりである。

まず序章（H・ブルーマー社会学の源流）だが、ここではブルーマー社会学の位置づけについて、ブルーマーが残した社会学理論や社会学研究から記述されている。ブルーマーは、シンボリック相互作用論や、集合行動論によって、アメリカ社会学の新潮流を築いたことで知られている。他方で、ブルーマーがそれらの理論を具体的にどのように展開したのかについては、近年「再評価」の流れが起こりつつあるものの、

必ずしも十分に補足されているとは言いがたい。ブルーマー社会学の本質にある現実問題への取り組み、初期の実証研究に注目しながらブルーマー社会学の原点に迫る必要がある。

第1章（H・ブルーマー社会学の軌跡）では、ブルーマー社会学のパースペクティブと研究スタイル、初期の理論研究、実証研究の成果をたどり、ブルーマー社会学に流れる社会学の方法が確認されている。

ブルーマーの実証的な問題関心は意外に広く、マスコミ研究、メタ社会学的考察としての社会問題・実証研究、産業化や社会変動の概念化をめぐる個別的な研究領域が存在する。これらの個々の問題のあいだには、ブルーマー内部で一貫している視角があり、端的に言えばそれは「主体的な人間の行為」への注目である。それはマクロレベルの社会形成を無視するものではなく、むしろブルーマーはそこから独自の集合行動論へと関心を広げていくことになる。この章では、ブルーマーにおけるこの理論と実証との絡み合いを、ブルーマー自身のテキストにそって記述している。

第2章（H・ブルーマーの集合行動論）の目的は、本論文の主題である集合行動論のアウトラインを示すこと、そしてその社会学における意義を検討することにある。集合行動論の理論的出発点となるのは社会的不安であり、それは循環反応として、集合的興奮状態を通じて周囲に感染する。その結果、一種の社会混乱が生じる。そのような状況下において社会的な秩序が形成されるプロセスとして、ブルーマーは流行現象に注目し、特に流行の社会的制御機能についての理論を提示した。

また、人びとの集まりである集合体は、多彩な集合現象を生み出す。その一つが流行である。流行を分析することは、その時代を知り、将来を予測する可能性をもつとブルーマーは考えた。

第3章（集合行動論からみた流行の構造と機能）では主に社会学における流行理論に的を絞り、流行の全体像を概観することを試みている。ここでは、ブルーマーをはじめとして、G・ジンメルや、E・サピアーらの社会学者の流行理論を下地に、流行理論を3つのカテゴリーに分けたうえで論じている。

最初は、流行の基礎理論として、社会学的な概念を規定し、基本的特性、発生領域などがまとめられている。つぎに、流行のミクロ的次元という視点から、流行を採用する個人の動機についての理論が論じられている。最後は、流行のマクロ的次元という視点から、流行の発生する社会的条件や社会構造、そして変動過程が説明されている。

第4章（H・ブルーマーの流行理論）では、1968年の流行についての基礎研究を取り上げて、ブルーマー流行理論の基本的立場が明らかにされている。ブルーマーの流行理論は、社会的過程としての流行の全体像を理解するための、社会学における総合的流行研究となりうるものであった。また、そこで流行について概念レベルの分析の

重要性が示唆され、かつ流行発生の具体的領域が取りあげられていることも注目される。

また、流行理論と集合行動論との関係を示す、集合的嗜好、集合的選択、社会的制御機能といったブルーマーの実証社会学のキー概念が取りあげられ、解説されている。ブルーマーは、従来の社会学における流行研究の問題点を指摘し、あらたな流行理論構築のための方法論を示した。それが流行の「集合的選択理論」であった。

第5章（H・ブルーマーの集合的選択理論）では、前章でその重要性が明らかにされた集合的選択の概念の位置付けを追求したものである。具体的には、ブルーマー集合行動論の中心部分である「集合体（人びとの集まり）による（流行）発生の要因」を、集合的嗜好、集合的選択に求め、その過程を明らかにした1969年の流行研究に注目している。この研究の重要性は、社会学の世界の流行理論研究で、長く論じられてきたジンメル流行論の階級分化論に対して、ブルーマーの集合行動論からの批判的見方が込められていたという点で注目に値する。

1969年の流行研究は、流行についての古典理論に典型的にみられる「上層（上流階級）から下層（中流・下層階級）に（スタイルが）流れる」という階級分化論に対抗し、むしろ流行を階層とは独立に生じる社会的プロセスとして位置づけるものであった。特に集合的選択理論は、流行を同一環境内で発生するものとし、流行を垂直的なものから水平的に生成する様子を説明したものである。

このような流行の集合的選択理論は、むしろ現代の流行現象の解明において大きな意義を持つ。今日の流行は、社会全体を巻き込んだ大規模なものから、それぞれの集団や、エリアごとに発生する小規模で分化されたスタイルに変わってきている。ブルーマーの流行理論は、小集団ごとに発生する小規模な形態への流行をあらわすファッドに注目している。したがってブルーマーの集合的選択理論は、流行理論においてファッドに着目するおとの重要度を確認したことになる。

第6章（H・ブルーマー流行理論の再考）では、まず前章において流行の現代理論として浮上したブルーマーの集合的選択理論の重要性について、ブルーマーの流行理論を受け継いだと言われるF・デーヴィスによる流行理論を解説している。デーヴィスは、流行理論を補足するためにあらたなファッション論を提示して、ブルーマーに応えた。それがファッション業界を視野に入れた研究であった。

第7章（H・ブルーマー集合行動論から流行理論、そしてファッション論へ）では、デーヴィスによるあらたなファッション論について、ブルーマーの流行理論を再構築した理論研究としての位置付けという観点から論じている。流行とは、潜在的に様々な方向に変化する現代的状況において、ひとびとの選択を一定の方向に差し向ける秩序を導入する。このような理解から、流行とファッションの関係を、歴史的過程・連続性において記述している。この視点は、ブルーマーの当初の理論的独創性である

集合的選択の理論の有効性をあらためて指し示している、ということが論じられている。

結び（H・ブルーマーの提起した問題と残された問題）では、ブルーマーの集合行動論と流行理論にとっての残された課題を確認している。

ブルーマーの流行理論研究は、確かに現代的な集合行動の特性を捉えることができるという点で評価に値する。社会がより分散化した現代的な状況において、人びとの積極的主体性が消費行動を変え、大規模な集合体による流行ではなく小規模な集合体によるファッドが出現した。ブルーマーとそれに続く流行理論は、ファッドを現代的秩序形成のひとつの典型的な形式として理解している点に特徴がある。

他方で、そういった状況の変化の背景にある社会構造の変化については、いまだに考察すべき点が多く残されている。大規模な流行とファッドのあいだの関係についても、したがってブルーマーの理論から内生的に論じることは難しいのである。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、G. H. ミードの社会行動主義の理論枠組みにもとづいて、(現象学的社会学やエスノメソドロジーと並んで) ミクロ社会学のひとつの潮流を形作る発端となったブルーマーについて、シンボリック相互作用論の提唱者というこういった見方では捉えきれない経験社会学としてのブルーマー像を描き出しており、近年のブルーマー研究において（主にその産業化論に注目しつつ）みられるようになった再評価の流れに位置づけることができる研究となっている。

特にブルーマーの流行理論は、これまで日本ではほとんど注目されてこなかったが、本論文はこれについての研究を学説史の立場から丹念に掘り起し、その意義を明確に示したものである。とりわけ、流行についてのタルドやジンメルなどの先行研究、さらにブルーマーの研究を批判的に継承したデーヴィスやシブタニなどの研究を幅広く渉猟し、ブルーマーの流行研究の全体像を集合行動として体系的に論じた業績としてみとめることができる。

第一に、流行やファッドという現代的な現象に視野をおきながらも、ブルーマーのテキストに内在してそれを丁寧に読み解くところから出発し、その理論の射程と限界をみきわめようとしていることである。現在の学説研究の一つの有力な方法は、研究対象の著者の未公開の原稿・資料を発掘したり、アーカイブの資料や関係者とのインタビューによって、それまで知られていなかった著者の姿や研究内容に光を当てる作業である。それに対して本研究は基本的にブルーマーの刊行した著書・論文をベースにした研究であるが、利用できる文献の丁寧な読み込みと、さらに彼の教え子たちによるブルーマー像の文献の収集を通じて、「シンボリック相互作用論」の唱道者や「反

パーソンズ」の旗手として従来のブルーマー像を打破することに成功している。申請者が新たに打ち出したブルーマー像は「人びとの集まり」を「集合行動」として、的確な「概念」を用い、またその概念は多様な事例を包摂できるようにし、さらに「選択過程を伴う生成過程」や流行などの社会的影響を「社会的制御機能」として分析するパースペクティブを展開した研究者像である。こうしたブルーマー像は彼の研究の実態をよりの確に示しているといえる。

第二に、ブルーマーの「再評価」を、シンボリック相互作用論の提唱者としてのブルーマーの理論的枠組から一貫させたかたちで行っていることがある。つまりマイクロ社会理論の体系化を行ったブルーマーの業績と、1960年前後にアメリカ社会学を席卷したサーベイ型の社会調査に対して概念と解釈の重要性を説いた方法論者としてのブルーマーの業績と、さらに具体的な社会現象や社会構造についての経験的・実証的な考察を、それぞれ個別にとりあつかうのではなく、集合行動論に注目することでこれらをひとつのパースペクティブに収めようとしている点である。

第三に、論文中にもっともスペースを割いて記述されている流行理論の展開についての貢献がある。社会学の流行理論は、階級論的なスタンスをとったジンメルの理論が有名だが、ブルーマーはシンボリック相互作用論者として流行を（必ずしも階級的枠組みにのっとらない）集合行動としてとらえた。この集合行動論と流行理論との結合から、ブルーマー独自の「不安定な状況の中での集成的選択による秩序の現出」という視点が導かれる。この理論の流れを丁寧に解き明かし、他の社会学的流行理論のなかにブルーマーの流行理論を位置づけることができた、という点がある。

このように、本論文はオリジナルな研究成果として認めうるものであり、博士学位に値する論文として評価できるものである。しかし次のような課題もある。

第一に、論述（特に5章から7章にかけて）においてリダンドな部分が散見されることである。重要な論点を繰り返す必要性はあるし、また学説研究としてテキストに沿った記述をするうえである程度は避けられない部分もあるとはいえ、各章は独立した論文ではないので、もう少し工夫がなされてもよかったのではないかと思われる。

第二に、第3章で流行の基礎理論が示されて、流行に関する現代の研究動向がよく理解できるように工夫されていることは、それ以後の各章の理解に大いに役立っている。ただ欲をいえば「結び」の章で、ブルーマーの研究を現代の流行研究にどのように生かすことができるのか、何か特定の具体的な流行の事例に即して述べられていると、彼の研究の意義もより明確になったものと思われる。確かに申請者はデーヴィスのファッション界の事例を紹介することで、ブルーマー理論の具体的適用の可能性を論証しておられる。ただ、デーヴィスの研究はブルーマーの流行研究の影響だけではな

く、シカゴ学派のもう一つの伝統である職業研究の系譜の影響も考えられ、デーヴィスの研究は職業界、業界の社会的世界の分析としても読める。

第三に、理論の具体的な適用における問題点と関連するが、現代社会学の水準（特に経験的研究の知見）から見て、ブルーマーの流行論に欠けている部分についての考察が薄いと思われる点がある。たとえばブルーマー自身は、流行の発生条件やそのプロセスを「科学的」ととらえるという立場に立っているという点には疑いがないものの、それが因果的な必然性として記述されているとみなせるのか、それとも確率論的にのみ記述できるのか、あるいは変数的アプローチとどこまで両立しうるのか。こういった点については、ブルーマー自身が論述を展開していないことはしかたがないものの、本論文においては最低限の見方を示しておく必要はあつただろう。

とはいえ、本研究はブルーマーの本領が集合行動の研究にあることをクローズアップさせることに主眼があり、彼の理論を具体的な研究に適用することまで求めることは、確かに学説研究の範囲を超えるものとなる。たとえ、具体的な研究への示唆が少ないとしても、学説史研究としての本研究の価値を決して損なうものではない。以上から、審査委員会は一致して、本論は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の審査にあたっては、公聴会を2015年1月8日（木）10時00分から12時00分まで、以学館大会議室にて行った。申請者は、1983年3月に日本大学法学部新聞学科を卒業後、1988年に同大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程を満期退学した。その後、1995年に同大学文理学部の助教授の職に就き、現在同大学文理学部教授（兼同大学院社会学専攻教授）として教鞭をとっている。博士論文につながる社会学理論分野での学術雑誌に掲載された論文、著作も多数あり、研究の蓄積が認められる。

審査委員会は、申請者の経歴ならびに業績の評価により、申請者が十分な知識と学識を有していること、外国語文献の読解においても十分な能力を備えていることを確認した。したがって、本学学位規定第25条第1項により、これに関わる試験のすべてを免除した。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は、申請者に対して本学学位規定第18条第2項にもとづき、「博士（社会学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断した。